

# パレスチナ／イスラエル地域研究への序章

## イスラエル政治社会研究における〈他者〉の表象の諸問題

白杵 陽\*

(キーワード) パレスチナ／イスラエル, ポスト・シオニズム, 〈他者〉の表象, 新しい歴史記述, 批判的社会学

- I. 「地域」としての「パレスチナ／イスラエル」
- II. 〈他者〉の表象をめぐる言説編成の転換
- III. 〈他者〉を表象する新たな試み
- IV. 結語

### I. 「地域」としての「パレスチナ／イスラエル」\*1

「民なき土地に土地なき民を (a land without people for a people without land)」。パレスチナへのユダヤ人入植の原動力となったシオニズム・イデオロギーの核心を凝縮したイズラエル・ザングウィル (Israel Zangwill, 1864-1926) のあまりにも有名な政治フォーミュラである。あるいはゴルダ・メイル・イスラエル元首相 (Golda Meir, 1898-1978, 在職1969-74) はパレスチナ解放運動が高揚した1969年6月には「パレスチナ人など存在したことはなかった」と公言して憚らなかった。このような語りに象徴的に示されるシオニズムにおける〈他者〉表象のあり方こそが本論において問われる中心的なテーマとなる。すなわち、パレスチナに向かったシオニストたちにとって「民なき土地」に住む人々 (ムスリム, キリスト教徒, そしてユダヤ教徒も含まれていた) は見えざる存在であった。当然ながら、あらかじめナショナリスト的な言説空

間から排除されてしまった姿なき〈他者〉であるパレスチナ人は「隠蔽された問題」としてシオニストの言説内部においては分節化されることもなく、長い間外部化されたままであった。イスラエルの人文・社会学者もこのような〈他者〉の表象から必ずしも自由ではなかった。

もちろん、シオニストは決して一枚岩ではないし、文化的シオニズムの父と呼ばれるアハド・ハ・アム (Ahad Ha'am, 1856-1927) 以来、ユダヤ人自身の「オリエント」性あるいは「セム族」としてのアラブとの同胞性を強調することによって「西洋」において「オリエント」として差別的に規定されたユダヤ人と地理的にはオリエントに住むアラブとの共通性を主張するシオニスト思想家・研究者も少数ながら存在した。オリエントやアラブに同情的なシオニスト・オリエンタリストは「文明化の使命」に燃えて「オリエント」に限りのない「愛着」を示していたことは間違いない。歴史学者シュロモー・ゴイテイン、

\* 地域研究企画交流センター助教授

人類学者ラファエル・パタイといった碩学以来のエルサレム・ヘブライ大学を拠点とする「エルサレム学派」のアラビストの研究者群がそれである。しかし、このようなオリエンタリストが描いた「アラブ」像あるいは「イスラーム」像はエドワード・サイードのオリエンタリズム批判から逃れられるものではなかった。〈他者〉の排除と愛着というシオニスト・オリエンタリストの言説編成に内包されているディレンマは、コロニアリズム的な知＝権力を背景として〈他者〉を見る側にあった研究者と、〈他者〉として沈黙を余儀なくされたオリエンタあるいはアラブとの間の相互の支配・従属の権力関係によって規定されてきたからである。むしろ、イスラエルにおいてシオニストによるアラブ認識の変遷を

扱った真摯な歴史学的研究が次第に生まれつつあることも、一方的な断罪に傾かないために指摘しておく必要があるが（とりあえずは [ALMOG 1983] [GORNÝ 1987] を参照）、しかしながらそれもごく最近の研究動向にすぎないことは確かなのである。

本論は〈他者〉に対してディレンマを伴うシオニズムの語り紡ぎ出す排他的な言説空間のなかで産み出された社会科学的なイスラエル政治社会研究の孕む問題性を「地域研究」の課題として問うことを目的としている。その際、エドワード・サイードのひそみに倣って、「本質主義 (essentialism)」的な〈他者〉像の再生産と共犯関係にあるアイデンティティの政治学への批判の戦略として、「アイデンティティの政治学を所与のものとして

\*1 当初、本論では内在的〈他者〉としてミズラヒームのうちのイエメン系ユダヤ人とくに焦点を絞り込んで、かつての拙論 [白杵 1993a] を発展させた議論を行う予定であった。しかし、パレスチナ人を含めた〈他者〉の議論を行うための前提となる予備的作業に予想以上に紙幅を取られてしまったためイエメン系ユダヤ人については触れることができなかった。しかしこのような予備的作業にも意味があると思いついたのは社会科学としての現代イスラエル政治社会研究の問題設定の射程が、たとえ否定的であってもエドワード・サイードによるオリエンタリズム批判とポストコロニアルな契機を介することによって現代パレスチナ研究のそれとやっとな部分的に重なり始めたという現状認識があるためであった。つまり私が1970年代後半にパレスチナ現代史研究を志したときに自明の前提としていた出発点となる認識——パレスチナ人はシオニズムのヘゲモニーの前に自らを代表＝表象する諸権利を文化的にも政治的にも奪われてきたがゆえに、研究者としてアラビア語資料を利用して現代パレスチナ研究を行う営為自体がパレスチナ人による自己表象の文化的・政治的試みに関与することになるという認識——を、相対的に若い世代の現代イスラエル研究者の一部が1980年代後半以降、ようやくにして共有し始めたことと実感しているからである。その意味では1990年代以降現代ヘブライ語を利用して現代イスラエル研究にも関与することになった私自身は、パレスチナ現代史研究を志した時の出発点に再び回帰しつつも、パレスチナ研究とイスラエル研究をポスト・シオニズム期の「対位法」的なパレスチナ/イスラエル研究として脱構築する動きに参加したいという衝動が他方であるのも事実なのである。このようなアカデミ

ズムでの動きをシオニズムにおけるポストコロニアル（あるいはポスト・シオニズム）な契機と呼ぶとするならば、この問題意識を共有する先駆的な仕事としてはエラ・ショハート『イスラエル映画——東洋/西洋および表象の政治学——』[SHOHAT 1989] をあげることができる。彼女は抑圧された「オリエンタ」に属するイラク系ユダヤ人としてイスラエルで生まれ、現在の生活の地であるアメリカでは民族的少数派であり同時に女性でもあるというマイノリティの視点から、映画批評の分野でイスラエル映画におけるパレスチナ人とミズラヒームという〈他者〉の表象を言説編成の観点から取り上げた（ショハートとサイードの接点に関しては [白杵 1995b] を参照されたい）。文学研究の観点からは [ALCALAY 1993] も同様の立場にたっている [白杵 1995c]。私は本論を執筆するに当たって以上の2つの著作に触発されたことをまず付記しておきたい。また「在日」の地点から「日本」のオリエンタリズムへの批判を精力的に展開する姜尚中 [姜 1996]、アメリカにおける日本人マイノリティの立場から「日本」を捉え返す酒井直樹 [酒井 1995] [酒井他共編 1996]、若手人類学者としてオリエンタリズム批判の鋭い舌鋒を発する太田 [太田 1994] [太田 1996a] [太田 1996b] らの論考からも多くの示唆を受けたことも記しておきたい。以上の意味で本論はこれまでの私の公表してきたパレスチナおよびイスラエルに関する諸論考での問題群をサイード以降の社会科学的な現代イスラエル政治社会経済研究の新しい動向に即して、私なりに「地域研究」を軸として再整理を行う作業としても位置づけることができる。

受け入れるのではなく、すべての代表 = 表象 (represent) が何のために、誰によって、どのような構成要素でもってどのように構築されているか (SAID 1993: 380) という方法を援用することにしたい。当然ながら、サイードのいう「心象地理」に現れる「彼ら-われわれ」といった二項対立的な自己集団と他者集団の境界の歴史的な形成過程が念頭に置かれているわけであるが、パレスチナ-イスラエル、アラブ-ユダヤといった二分法がオリエント-オクシデントに重ねられて、実体的な区分に封じ込められる固定化の問題性、あるいはこのような区分を成立せしめた政治主体としての「国民国家」的あるいは「民族国家」的なネーション・ステートにからめとられた言説編成の起源自体が問われなくてはならなくなる (サイードの言説の形成過程を彼自身の出自に求めて、アラブでありながらパレスチナ社会においてはマイノリティのなかのさらにマイノリティであるアングリカンのキリスト教徒として、内部者であると同時に外部者である「越境」の観点から、彼の境涯の「雑種性」を積極的に評価した議論としては [白杵 1995b] を参照されたい)。

シオニストの言説編成において〈他者〉として排除され、あるいは周辺化かつ抑圧された存在として本論で想定されているのは、ユダヤ人にとって「民族」的な〈他者〉としてのアラブあるいはパレスチナ人ばかりではない。アシュケナジームにとってユダヤ人／教徒の同胞のなかの「オリエント」的な〈他者〉としてのスファラディームおよびミズラヒームも含まれている (スファラディームおよびミズラヒームの用語法に関しては [白杵 1993] [白杵 1994b] を参照されたい)。換言すれば本論においては、二重の意味で〈他者〉

性を帯びた集団、すなわち、外部の他者として想定されたアラブあるいはパレスチナ人、内部の他者として想定されたスファラディームおよびミズラヒームが言及の対象にされる。なぜなら、シオニストがパレスチナに入植を開始した1880年代、この「民なき土地」には「パレスチナ人」(当時は「パレスチナに住むアラブ」として分節化された呼称は存在しなかったのでここでは括弧付きで使用する)、そしてスファラディームおよびミズラヒーム (当時はイスラーム世界出身の「オリエントのユダヤ人 (Yehudei ha-Mizrah)」として認識されていた。以下ではミズラヒームとのみ表記する) が、パレスチナにおいてはすでに居住していたのである。世俗的シオニストはパレスチナでの自らの新移民社会を「新イシューヴ」(「イシューヴ」とはイスラエル建国以前のパレスチナのユダヤ人／教徒コミュニティ)と呼んでいた。その一方で世俗的シオニストよりも前からパレスチナに住んでいたハレディーム (敬虔な人々) と呼ばれるウルトラオーソドックスのユダヤ教徒コミュニティを、伝統-近代に基づく新旧の宗教性を軸にしながら、内在的外部者として侮蔑的に「旧イシューヴ」と呼んだことも付け加えるべきであろう。

ここでは「見えざる存在」を構成する人々が異質な民族性に基づく〈他者〉、オリエント性に基づく〈他者〉、伝統的な宗教性に基づく〈他者〉として、ユダヤ的、ヨーロッパ (西洋) 的、近代的・世俗的なアシュケナジームによって二項対立的対置のもとに排除され、周辺化あるいは抑圧されていることが見えてくるのである。繰り返しになるが、これらの諸集団は、シオニズムの言説編成においては外在的外部あるいは内在的外部を構成する〈他者〉として「見えざる存在」に貶められ、

オクシデントとオリエンタリズムという両者の権力関係が投影されたダイコトミーのなかで後者の性格を強制されていたのである。

もちろん、〈他者〉を排除／抑圧／周辺化するナショナリスト的な言説空間の形成は、自／他の区別を排他的に固定化して捉える本質主義を特徴とするエスノセントリズム的差異化の政治過程においてむしろ普遍的な政治現象として把握されるべきものであり、シオニズムの言説編成においてのみことさらに特権化される必然性はまったくない。にもかかわらず、私が本論で取り上げるのは、私自身の問題関心のあり方、あるいは研究者としての思い入れという個人的な契機が最も強いモメンタムになっているからである。しかしそれ以上にシオニズムという思想と運動が誕生し、再生産構造が確立した「国民経済」に基づく「ネーション・ステート」へと成長していった「時間 (=時代)」と「空間 (=場)」の交錯のあり方、つまり国家による時間と空間の領域化を「地域研究」として問題にするとパレスチナ／イスラエルは極めて興味深い事例として浮かび上がってくるからでもある。すなわち、思想と運動としてのシオニズムが生成した時代と場とは、かつて「世界史」の主体であり、自由と平等のための解放運動＝ナショナリズムとして自ら表象する権利を独占的に享受しえたネーション・ステートが集合する場であった19世紀ヨーロッパであり（しかしシオニスト・ユダヤ人はそこでは〈他者〉化されていた）、他方でシオニズムがネーション・ステート的な実体として誕生し成長していったのは、ヨーロッパという権力主体によって「オリエンタリズム」という客体に貶められ、さらにはコロニアリズムのもとで自らを表象する権利を奪われた人々が住んでいた「パレ

スチナ」と呼ばれるようになった東地中海の一地域であったからである。

ヨーロッパ社会に固有であったユダヤ人差別の問題が「パレスチナ」に転嫁・移植される歴史過程において、コロニアリズム的あるいはオリエンタリズム的な契機が隠蔽される目的で「ユダヤ民族史観」に基づくユダヤ人解放の言説が総動員される一方で（その代表例は出エジプト記の語りである [SAID 1988: 161-178]）、その〈他者〉とされたパレスチナ史の言説が沈黙させられてきたからである [WHITELAM 1996]。板垣雄三が指摘するように帝国主義による「差別体制の重層的構造」[板垣 1992b: 26] がたえず拡大的に再生産された場こそがパレスチナであった。シオニズムの言説編成において外部を構成する「見えざる存在」が差別化されていったプロセスにおいて〈他者〉が沈黙化させられるだけでなく、言説主体の正当性の担保としても利用される事態を、新しい研究の潮流のなかでその一端を明らかにする必要がある。シオニズムは、起源、誕生、ルーツといった用語群で正当化された「始源」に関する歴史的言説を独占してきた経緯があり（これをシオニズムの「神話」的契機と呼ぶ）、最近の研究はこのようなシオニズムの「神話」的な契機を明らかにしてきた。私はそのような批判的作業を通して逆に「見えざる存在」の「排除された歴史」にあたたかい眼差しを注ぎ、その視点からシオニズムのオリエンタリスト的・コロニアリスト的言説編成を逆照射していき、「ポスト・シオニズム」的状況に向かって「差別の克服と連帯の獲得」[板垣 1992b: 26] への展望を構想してみたい。

ところで、シオニズムの排他性に支配されたイスラエル社会科学の言説が孕む問題性を

議論するのに「地域研究」という方法を持ち出してきた点について若干説明しておかねばならないであろう。アメリカ合衆国での地域研究は国家の政策に従属していたため冷戦が終焉を迎えると「帝国」的要請から自由になって存在意義を失った。他方で20世紀末に至って人文・社会科学も専門的細分化のために全体を見通すことができなくなっており、総合的な認識に基づく「地域研究」の必要性が改めて唱えられ始めた。立本成文は地域研究への期待を「既存のディシプリンでは捉え切れない問題群に地域研究という方法で取り組むことによって新しいパースペクティブを求めようとするものである。地域研究はこのような営為のとどまることを知らないアリーナであり、研究のフロンティアであり、未完のプロジェクトである」[立本 1996: 317]と表現している。このような立本の期待は、私が本論でめざしたパースペクティブと共通しており、その意味ではその学問的マニフェストを共有している。しかしながら本論においては「総合的地域研究」の問題と方法論を概念的に議論する用意はないし、現在の私にはその能力も資格も欠いている。ここでは地域研究への期待を表明するにとどめておきたい。<sup>\*2</sup>

とはいいいながらもこれまで中東地域研究に携わってきた私自身の問題関心に即していえば、自／他の境界性を認識論的に問うような「地域」設定にこだわる姿勢は一貫している

つもりである。本論で「パレスチナ／イスラエル」という地域呼称を「/」という曖昧な記号で結んであえて使うのも「地域」として「新たな接合の可能性を開示してくれる」[太田 1996: 127] ことを期待しているからなのである。再度注意を喚起しておきたいのは、本論は「パレスチナ／イスラエル」という二項対立に封じ込められた土地の占有と歴史の独占を集約した知の権力構造の固定化、あるいはパレスチナ人アイデンティティやイスラエル人アイデンティティという時間と空間をめぐる記憶の「民族的」固定化にはあくまで抗する意図をもって記述されている点である。一見すると地理的には非常に限定されたかに思える「パレスチナ／イスラエル」という「地域」は、地理的境界をもつ領域ではなく、語り手がそれぞれ思い入れを込めている政治的な言説が交錯し、相互の記憶が接触するメタフォリカルな境界をもつ時空間として分節化された、エドワード・サイードが呼ぶところの「心象地理」的な概念として本論では使用されている。したがっていくつかの言説のせめぎあいが織り成す「紛争」の構図そのものを脱構築し、「紛争」構造を成立させている味方-敵あるいは自己集団-他者集団が相互の境界を曖昧にしていくなかで新たな自他の関係性を築く営為を垣間見ること自体が本論全体を貫く問題関心なのでもある。繰り返しになるが「パレスチナ／イスラエル」という一見すると対立的二元論を予想させる併記表

\* 2 私なりの中東地域研究についての見解は、1996年6月29日に地域研究企画交流センターと京都大学東南アジア研究センターとの連携研究「地域研究と地域概念」研究会（於地域研）において報告した「場」設定に賭ける地域研究——「中東」「現代」「史」研究者のディスカール」において披露したことがある。同報告においては、空間（「中東」）、時間（「現代」）、ディシプリン（「歴史学」）の交差

する「場」の設定に賭けることに地域研究者としての存在理由を見い出す議論を展開した。本論は同報告の成果の一端を踏まえていることはいうまでもない。同共同研究会においては地域研の松原正毅、吉田集而、東南研の古川久雄、高谷好一、応地利明、立本成文の各氏から貴重なコメントをいただいた。記して感謝申し上げる次第である。

現を私が使用しているのは、「紛争」を介して新たな時空間としての「パレスチナ／イスラエル」を統一的に捉える方法がむしろ「地域研究」の方法として積極的に求められているという立場に立っているのである。

したがって、本論では「中東」という「地域」名称としては現在ではかなり一般的になった用語はとりあえずは棚上げされる。というのも、私自身は自らを中東地域研究者と位置づけてはいるものの、「中東」という地域名称が第二次世界大戦後に確定されることになり地政学的な含意が色濃く残っているからである。すなわち、本論で取り上げられる「パレスチナ・イスラエル紛争<sup>\*3</sup>」の始源をめぐる最近の議論は、アラブ諸国やイスラエルなどの主権国家を自明の前提とした「中東戦争」や「アラブ・イスラエル紛争」といった第二次世界大戦後の国際政治的な文脈ではなく、諸国家システムが成立する以前である20世紀初頭のパレスチナという、まだオスマン帝国の統治下にあった時期へと収斂する傾向にあるからである。

このように「地域」概念を戦略的に使用しているのは、私の立論においては先ほども引用した板垣による地域概念の定義、すなわち『「地域」は、単に所与の固定した地理的・空間的範囲としてではなく、また『地方』的地域としてでもなく、人間とその集団の活動が

主体として埋め込まれることによって実現し獲得されるような、しかも多重の伸び縮みする場として、問題化する」[板垣 1992b: 8]という考え方に依拠しているからにほかならない。このような「地域」は「自己主張の全体と自己超越的部分とが、かならずどこでも背中合わせに存在しているホラーキー構造、つまりどこで区切っても統合性ととも全体性が宿ってしまっているようなホロンの層状ヒエラルキー」[板垣 1992b: 8]をもっている。この立場に基づいて板垣は「n地域」という作業モデルを提案しているが[板垣 1992b: 5-6]、具体的な作業としてのパレスチナ問題の歴史的図式化といった[板垣 1992a: 28-31]、板垣の立論自体の戦略性、あるいはその戦略的記述の仕方に多くを負っているという私の個人的な契機もここで指摘しておきたい。それゆえ、本論では「地域」をその「固有性」に収斂させ、閉鎖的な時空間としてみなしてしまう実体概念としては捉えない。その代わりにいわゆる地理的な領域としての地域を越えたところで現れる戦略的言説として「地域」を説明していく関係概念として捉えていく立場をとることになる。繰り返しになるが、「地域」設定そのものに、つまり「彼ら」を「われわれ」に組み込んだ「パレスチナ／イスラエル」という「地域」を切り抜く営為そのものに自らを賭けること

\*3 ここで「パレスチナ・イスラエル紛争」という、従来わが国ではあまり使用されなかった用語を使ったのは、むしろ1967年戦争（いわゆる「第3次中東戦争」）以降、アラブ・イスラエル紛争あるいは中東戦争が「パレスチナ化」したという認識が前提となっているからである。したがって、本論全体を貫く問題意識でもある〈他者〉としてのパレスチナ人がアラブ・イスラエル紛争の枠組みにおいてそれまでとは異なった位相をもった主体として浮上してくる1967年以後の紛争状況が、イスラエル建国以前の委任統治期パレスチナでの紛争状況と類似してきたという認識レベルでのアナロジーがある。そのよ

うな歴史的認識を支えているのはあくまでユダヤ人とパレスチナ人との直接的対峙という意味での紛争の起源そのものへの趣及的関心が、現況を歴史的現在において理解するという問題意識に支えられていることを改めて繰り返しておきたい。以下で議論するシャフィールも「イスラエル・パレスチナ紛争 (Israeli-Palestinian Conflict)」という用語を自著の書名に使用しており、やはりこの認識を共有している。アラブ・イスラエル紛争の「パレスチナ化」、つまり「パレスチナ・イスラエル紛争」の形成と発展に関しては[白杵 1993b]の論考を参照されたい。

自体に、新たな問題群を発見する学問としての「地域研究」の意義を見出すのである。

## II. 〈他者〉の表象をめぐる言説編成の転換

以上のような「地域研究」的な問題関心と方法に基づいた場合、パレスチナ／イスラエルという時空間の一部分をなす現代イスラエル社会政治研究に関する社会科学的アプローチは現在、重要な転機に直面しているといえよう。シオニズム的言説によって編成されたユダヤ民族の「国民国家」あるいは「民族国家」としてのイスラエルという枠組みの自明性への揺らぎが始まったからである。これを「ポスト・シオニズム」的状況と呼んでおこう。具体的には1982年のレバノン戦争を契機として現代イスラエル政治社会研究における「ポスト・シオニズム」的状況が議論されはじめた [COHEN 1995]。しかし「ポスト」という消極的な表現に集中的に現れているように現在に至るまで新たなパラダイムは混沌として見えていないといっても過言ではない。むしろ、このような閉塞状況を克服しようとする模索的な議論が萌芽的ではあるが生まれつつあるが、そのほとんどの論者はわが国において議論されているような「地域研究」への期待と意味づけを行っているわけではない。しかしながら、特に冷戦終焉と湾岸危機・戦争後の急速な中東和平の進展、そして1993年9月のイスラエルとPLOの間の「原則合意」の締結以降に顕在化し、イスラエルのアカデミズムの世界で「市民権」を獲得しつつある「対位法」的な新しい研究動向とその問題関心のありようは、新しい息吹きを感じさせるに十分な兆候である。すなわち、そのような新たな動向は、前述した板垣や後述する大岩川和正の先駆的なパレスチナ／イスラエ

ル地域研究的な議論を現在の課題に沿って変奏曲風にアレンジして再登場したポストコロニアル批評あるいはカルチュラル・スタディーズなどの狙いと軌を一にしているからであり、わが国の若手研究者の研究動向にも共通する点が多いように思われる（この点については「IV. 結語」で簡単に述べるつもりである）。

翻って「ポスト・シオニズム」的状況を議論する以上、シオニズム主流派が囚われた正統的な言説とは一体何だったのかを問わねばならない。それをごく簡潔に表現すれば、イスラエル建国に携わった労働シオニズムのエリートたちが囚われた建国期の公式的言説（ベングリオン首相が推進した国民統合のためのイデオロギーとしてイスラエル版エタティズム (Mamlahiyut) を正当化する言説）であるといえる。それを社会科学的言説として表現したのが「近代化論」に基づくパーソンズ流の機能主義を駆使したイスラエル社会学界の大御所 S・N・アイゼンシュタット・ヘブライ大学教授であった（ハイファ大学の「批判的社会学者 \*4」の一人ラムはこのグループを「国家建設学派 (Nation-Building School)」と命名している [RAM 1995: 23-46]）。ラムの整理に従えば、正統派の言説はむしろ労働党のヘゲモニーの盛衰とともにその後変容していく。つまりその第2期はベングリオン首相の退陣（1963年）後で労働党のヘゲモニーが衰退していくポスト・ベングリオン期であり、中東イスラーム世界からの新移民（ミズラヒーム）、とりわけモロッコ系移民のイスラエル社会への「吸収 (=同化)」をめぐる政策要請に基づく議論の活発化を契機にして（この問題については [USUKI 1995b] [白杵] を参照されたい）「再版機能主義 (Revised Functionalism)」が登場し、それまでのマクロなレベル

の機能主義からマイクロおよびメソ・レベルでの修正が加えられた機能主義へと軌道修正を行った。さらに第3期としては1997年に労働党権力が凋落し野党化したのに伴って生まれた「再来機能主義 (Revisited Functionalism)」であり「エリートの精神に浮上してきたアンビヴァレンスを表現している。つまり(システムを中心にいる研究者として) 現行システムにおける優越性を間違いなく確信しつつも、システムの周辺からの声が——実際には聞く気がないにしても——聞こえ始めた」状況を反映しているのである [RAM 1995: 65]。このようなアンビヴァレンスこそ「ポスト・シオニズム」期の最大の特徴であり、本論が注目する動向といってもいい。後段で触れることになるが、この正統派の「再版および再来機能主義」の第2期、第3期を代表する政治社会学者がヘブライ大学のダン・ホロヴィッツとモシェ・リサクであることをあらかじめ指摘しておきたい [HOROWITZ & LISSAK 1978] [HOROWITZ & LISSAK 1989]。

「ポスト・シオニズム」期を象徴する論争の最も代表的な例をあげるとすれば、1948年戦争、イスラエル建国およびパレスチナ人難民発生と言説に関わる「新しい歴史記述」をめぐる論争ということになる。1982年のレバノン戦争を契機とするイスラエル世論の分裂とそれに続いて1987年12月に始まったパレスチナ人のインティファダの進展に呼応するかのようにこの論争は急浮上してきた。労働

党のヘゲモニーが確固たる時期にはこのような議論がイスラエルのアカデミズムで闘わされることなど考えられなかった。もちろん「新しい歴史記述」をめぐる「新しい歴史家たち」の論争はイスラエルに限定されておらず、欧米のユダヤ系研究者も含んでいる。エルサレム・ヘブライ大学のベニー・モリス、オックスフォード大学のアヴィ・シュライム、ハイファ大学のイラン・パペなどが著名であるが、かれらはイスラエルおよびユダヤ人ディアスポラ諸コミュニティを越えたところでイスラエル現代史研究の論争の震源地となっているのみならず、人文・社会科学の分野でも少なからずインパクトを与えているのである。

この論争をめぐるレビューやアンソロジーが引きも切らず刊行されている状況は現在でも続いている(その嚆矢としては [SILBERSTEIN 1991]、雑誌特集号としては [HISTORY AND MEMORY 1995]、ヘブライ語思想雑誌による特集としては [TEORIA U-VIQR-ET 1996]、最近の書評論文としては [CAPLAN 1995] などを取りあえずあげることができる)。私見によれば「新しい歴史家たち」が果たしたパイオニア的意義は、〈他者〉としてのパレスチナ人の存在をイスラエルそのものを語る言説空間に積極的に取り込んだことであろう。我田引水になるが私自身もパレスチナ・アラブ現代史をアラビア語文献を利用して研究してきた歴史学徒としてイスラエルにとっての〈他者〉の立場から、「新しい歴史記述」

\* 4 ここで「批判的社会学者(Critical Sociologists)」として念頭においているのはハイファ大学に拠点を置く雑誌と社会学者たちである。代表的な研究者としては新従属理論をイスラエル社会分析に適用したシュロモー・スヴィルスキー [SWIRSKI 1989]、スヴィルスキーと当初は関心を共有したが

近年ではフェミニズムに立脚した女性史への傾斜を強めているデボラ・ベルンシュテイン [BERNSTEIN 1987] などである。本文で指摘したようにウリ・ラムは最近、歴史・政治・社会を含む広義のイスラエル社会学史をアジェンダごとにサーヴェイした新著を世に問うた [RAM 1995] などがある。



の論争の概要を、イスラエル歴史学会における「修正主義学派」の登場の政治的、社会的な文脈に注目して、アラブあるいはパレスチナ人の歴史家の作品と対比しながら、簡単ではあるが批判的に紹介したことがあった〔白杵1994a〕。もちろん、最近では「新しい歴史家」に対する本格的に反論を行った研究も出版され始めている〔KARSH 1997〕。

「新しい歴史家たち」の登場とは同時期ではあったがその「修正主義」学派とはほとんど接点のなかったゲルシオン・シャフィール（カリフォルニア大学サン・ディエゴ校社会学教授）が、20世紀初頭の第2波アリヤーに焦点をあてた『土地、労働、およびアラブ・パレスチナ紛争の起源 1882～1914〕〔SHAFIR 1989〕のペーパーバック新版〔SHAFIR 1996〕を1996年という時期に内容に改訂を加えずに再版したことも象徴的な事件であるといえよう。わが国における代表的な現代イスラエル研究者の立場から「パレスチナ地域研究」の必要性を生前から一貫して唱えていた故大岩川氏の業績〔大岩川 1983〕をシャフィールのそれに先立つ先駆的な研究として私自身は位置づけたことがあった〔白杵 1995a〕。シャフィールは今回のペーパーバック新版序文で初めて「新しい歴史家たち」に言及し、自らを「批判的社会学者」と位置づけたうえで「新しい歴史家たち」との共通性を認めつつ、かれらへの批判を展開している。シャフィールの批判的な議論は傾聴するに値するので、この問題に関して先に触れた拙論〔白杵1994a〕で展開した議論を発展させる意味合いをも込めて、まずはかれの議論の論点を概観することから始めることにしよう。

さて、「新しい歴史家たち」の代表的論客ベニー・モリスは「新しい歴史記述」の出現

をもたらした2つの重要な要因として、イスラエルにおける30年後の公文書公開法の立法措置の実施と、「建国の父たち」の次世代で建国前後に生まれた新しい世代の研究者の出現を指摘した。シャフィールはこの指摘には基本的には同意しつつも「新しい歴史家たち」の関心がイスラエル建国とその後の「建国神話」批判に傾倒していることには疑問を呈し、自らはむしろ「建国の父たち」のイデオロギーの下部構造の解明、つまり土地および労働という社会経済的な契機の重要性を主張する。つまり「新しい歴史家たち」のなかでは古い世代に属する社会主義シオニストの最左派の異色のイデオログであった故シムハ・フラパンの著作〔FLAPAN 1987〕の副題の「神話と現実」のダイコトノミー的な発想にシャフィールは批判の矢を放つのである。「神話は灰色のかげの部分を消し去ってしまう解釈に導かれやすい。神話はその意味を文脈からではなく、例えば男女や善悪の原型など対極の二者の構成要素の配置から導き出される象徴システムである。二者の関係は歴史的な文脈の影響を捨象し、通常は固定化されて繰り返し演じ切られる。パペ、シュライム、そしてモリスによって論駁された主要な神話とは、非合理的かつ好戦的勢力が独立戦争とそれに続く和平交渉を拒絶することで平和的かつ妥協的勢力を切り崩したというものである。イスラエルはその結果、明らかに自らの立場を正当化しようになったという議論である」と彼は指摘する。このような「新しい歴史家たち」による神話的言説への反駁に対して、イスラエル国家建設の神話的言説自体がアラブ・イスラエル紛争の激化に伴うたび重なる戦争の反復のなかでどのように形成されたのかを考察する必要がある、さらにそれ

以前のユダヤ・アラブ関係がどうであったかを改めて問い直す必要があるとシャフィールは主張する [SHAFIR 1996: x-xi]。

「神話が紛争を増幅させ紛争を解決できない敵対的性格を帯びる宇宙論的レベルまでに変型してしまうのに対し、イデオロギー的思考の主要な構成要因は調和的な社会関係の外観の裏側に潜む社会的な矛盾を覆い隠すものである。イデオロギーは一般的には、未解決のままの諸矛盾を打ち消したり、隠蔽するものなのである。……(中略)……イデオロギー的思考は現代ナショナリズムに典型的な目的論的な語りである」。このように断言したうえで、シャフィールは現代ナショナリズム論に関するかれなりの立場に依拠して労働シオニズムにその批判の矛先を向ける。すなわち、労働シオニズムは「皮肉にも相互に矛盾する2つのイデオロギーを同時に持ち出すことで、パレスチナ人住民との紛争を最小限にみせかけ、その紛争を隠蔽しようとした。すなわち、第1のイデオロギーでは、労働シオニズムはパレスチナ人社会に恩恵の影響をもたらしたと主張し、他方、第2のイデオロギーではシオニズムはパレスチナ人社会にまったくインパクトを与えなかったという主張なのである」。つまり、〈他者〉に対して恩恵の効果があったというシオニズムの第1の言説と、〈他者〉とは無関係だったというシオニズムの第2の言説が孕んでいるディレンマは、シオニズムが内在させている「文明化の使命」をもつ解放者としての側面を強調する一方で〈他者〉を排除する抑圧者としての側面を隠蔽しようとしていることに由来している。

ユダヤ人歴史家ハワード・サハルの定評のある『イスラエル史——シオニズム勃興から現在まで』[SACHAR 1979]の記述を第1の

シオニズム・イデオロギーの恩恵的側面を体现した記述としてシャフィールは槍玉にあげる。アラブ大衆がユダヤ人移民と入植によってもたらされた近代化の恩恵を被ったとサハルは思い込もうとしている。だからこそ、シオニズムへの反対者はアラブ・エリートのかなかの狭い範囲、つまり、土地所有者層のエフェンディーであり、キリスト教徒の中産階級であり、後には周辺アラブ諸国の反動的指導者たちだけなのだと結論する。このようなイデオロギー的言説に対してシャフィールは、シオニズム運動がもたらした「近代化」とはユダヤ人入植者と現地のアラブの人々との間の植民地主義的關係に根ざしており、ユダヤ人入植の究極の目的である「労働の征服」と「土地の征服」のイデオロギーは排外主義的なのだとする。なぜなら、「労働の征服」とはアラブ労働者をユダヤ人労働者に置換することを目的としたものであるし、ユダヤ民族基金によって購入されたアラブの土地は2度とアラブに売却されることはなく、ユダヤ民族基金所有の土地ではアラブ労働者を雇用することもないからである。ユダヤ人メンバーだけであるキブツは民族基金の土地の上に設立され、第2波アリヤー(1904-1914年間のパレスチナへのユダヤ人移民)の生み出した入植形態のうちで最も排外的でナショナリスティックであると指摘したうえで、シャフィールは第1のシオニズムによる恩恵的效果を讃えるイデオロギー的正当化を糾弾するのである [SHAFIR 1996: xi-xii]。

他方、第2のシオニズムのイデオロギー的言説は、ユダヤ人とアラブの両コミュニティは相互に分離したままなのでユダヤ人移民がパレスチナ人を搾取したことなどなかったというものである。この言説は前述したように、

現在に至るまでイスラエルの正統的な研究者たちによって公認されたイスラエルの公式的な言説として広く流布されている。すなわち、先ほども触れたイスラエルを代表する社会政治学者であるホロヴィッツとリサクが、「二重社会」や「二重経済」という用語を使用して、両コミュニティは限られた市場関係しかもっていない、2つの異なる社会経済システムを有していると主張していることに典型的に現れている [HOROWITZ & LISSAK 1978: 17-18]。これに対して、シャフィールは、ユダヤ人社会（イシューヴ）がパレスチナにおいて拡大する限り、イシューヴは土地購入、伝統的な基礎物資、後にはパレスチナ人住民の大量の追放などを通してパレスチナ人社会との関係を維持したと反論する。そして第1波アリヤー（1881-1904年の間のパレスチナへのユダヤ人移民）の植民地主義的入植はユダヤ人所有の農場でのパレスチナ人労働者の低賃金での雇用を通じて搾取することに依存していたし、第2波アリヤーはユダヤ人入植地への排他的な入植とそこからのアラブ人住民の追放という、むしろアメリカやオーストラリアで見られた先住民族排除を通じた入植と類似した形態の植民地主義にとって代わられたにすぎないとする。したがって、パレスチナのユダヤ・アラブ両社会の分離はイスラエル・パレスチナ紛争の原因ではなく結果であるとシャフィールは結論づけるのである。<sup>\*5</sup>

イデオロギイ的思考は神話の構築に先立っており、同時に神話と連動して機能するとも

いえる。シオニストがユダヤ人入植者・移民者とパレスチナ・アラブとの紛争はなかったとか、両者は実は最小限の関係しかもっていないなかったか、無関係であったなどと主張することはいずれにせよ、紛争解決を阻害し全面的軍事対決へ激化することに結果的には貢献することになった。この厳然たる事実自体が後のアラブ・イスラエル間の紛争「神話」（「アラブとユダヤの2000年来の宿命的対立！」といった新たな言説）の誕生を生み出す豊饒な土壌となったことはいうまでもない。その意味では「新しい歴史家たち」と「批判的社会学者」の仕事は同じ物語の2つの相互に関係した側面を代表している、とシャフィールはいうのである。

シャフィールの政治経済分析はイスラエルという枠組みを自明とし、あるいはその枠組み自体を政治的「神話」の言説を動員することで正当化するイスラエル政治社会分析における正統派の「文化主義」的アプローチへの批判として生まれた側面は否定できない。したがって、社会経済分析をイデオロギイ分析の基礎とする戦略的姿勢に関しては、言及対象を20世紀初頭の第2波アリヤー期に限定しているという点で、個別の実証的歴史記述をめざす批判的社会学者としてシャフィールはきわめて慎重である。しかし現在のイスラエル研究におけるこのような批判的な関心のあり方は、アラブ・イスラエル紛争の激化の状況のなかでは決して正当に評価されることはなかったことを改めて思い起こす必要がある。なぜならイスラエル社会の批判的研究の

\*5 シャフィールの提起する問題はイスラエルとイスラエル占領地であるヨルダン川西岸・ガザとの社会経済的関係をどう捉えるかというテーマと密接に関わってくる。いわばテーマ設定が方法を規定する側面が強調されるべきであろう。1990年前後まで

のパレスチナ人の議論を踏まえた両者の関係と第1波アリヤー以来の「イシューヴ経済分離発展論」を軸に展開する「二重経済」論をめぐる議論に関しては [白杵 1990] [白杵 1991]、とりわけ後者を参照されたい。

先駆的な役割を果たした大岩川がわが国におけるアラブ・イスラエル紛争をめぐる敵対する論争の渦中に置かれると二分法的な敵-味方の図式に流し込まれて自動的にプロ・アラブ的=「反ユダヤ主義」的立場（この等式が成り立つ場のイデオロギー性を自覚することなく）として烙印を押されたという過去の事実をわれわれはやはり銘記すべきなのである [臼杵 1995a]。

### III. 〈他者〉を表象する新たな試み

シャフィールは研究仲間のペレドとともに、1993年のイスラエルとPLOの「原則合意」締結を踏まえた最近の論考でさらに批判的な議論を展開している (PELED & SHAFIR 1996)。すなわち、その論点はイスラエルでの人文・社会科学分野の正統派的なアカデミズム研究者の言説空間においてパレスチナ人あるいはイスラエル占領地が相変わらず「見えざる存在」としてしか扱われず、イスラエル社会をあたかも閉鎖的な「孤島」の如くに捉えている点への批判に集約される。つまり、正統派シオニスト研究者の規範的なコンセンサスでは「パレスチナ・イスラエル紛争」は、イスラエル社会の形成あるいはイスラエル人の集団意識形成にとってあくまで外在的なものとみなされ、その紛争がイスラエル社会形成に内在的に与えた影響をまったく無視するかあるいは極小化しようとしてきたというのである。イスラエルというネーション・ステートへの政治社会統合を自明の前提とする内部者と外部者との二分割の思考は後者に分類されるパレスチナ人のイスラエルからの排除とかれらへの差別を内在させるシステムとして機能せざるをえなくなる。だからこそ、1967年戦争におけるイスラエルによるヨルダ

ン川西岸・ガザの占領も、1979年のエジプト・イスラエル平和条約の締結も、イスラエルにおける人文社会科学の正統派の言説のあり方にほとんど影響を与えなかった。その際も、ラムが命名するところの「再版および再来機能主義」を信奉する大御所ホロヴィッツとリサクが批判の矢面に立たされるのである。

ホロヴィッツとリサクなどの正統派の社会学者がイスラエルの直面する危機には良心的な姿勢を示しつつもネーション・ステートの枠組みを自明の前提とする限り、かりに占領地をめぐる国内の多様な論議を踏まえたところで紛争への理解とその解決という観点からは、せいぜいのところイスラエル政体は“過重な荷物 (overburdened)”を抱え込んでしまったという苦渋に満ちた消極的かつ悲観的な展望にしか至ることができない [HOROWITZ & LISSAK 1989]。というのめかれらは、それまでの労働シオニズムの政治文化をユダヤ的、西欧的、民主的、かつ“革命的”と性格づけてそれらをイスラエルの社会的・政治的行動の決定要因として捉え、イスラエルが直面する“危機”を“シオニズム革命のルーティーン化”といった国民国家=民族国家の言説においてしか説明できないからである。むしろ、1977年のリクード政権の誕生に関する議論においてはリクードを支持した社会層にミズラヒームが多かったという統計的事実を突きつけられ、研究の主要テーマをシフトさせた研究者もなかにはいた。しかし、その問いのあり方は「ユダヤ人でありながら、非西欧的、非民主的環境から生まれた非西欧的、非近代的移民の流入によるパロキアルでエスニックなシオニズムの挑戦に労働シオニズムの普遍主義的リベラル勢力はどのように

対処するか」というものであった。すなわち、オキシデント-オリエント、近代-伝統、合理的-パロキアルという西欧的諸価値の絶対化を軸とした従来の二項対立的な図式で、アシュケナジームとミズラヒームとの権力関係の正当化を説明しようとしたのである。結局のところ、イスラエル国内や占領地のパレスチナ人をあくまで〈他者〉として扱って分析枠組みに内在的に組み込むことには成功せず、ただ問題の所在をイスラエルというネーション・ステートの直面する矛盾を指摘するに留まっただけであったと批判する（リサクによる批判的社会学に対する反論に関しては [LISSAK 1996] を参照）。

以上のような正統派的な研究者たちの“危機”に対する知的混迷状況を受けてシャフィールとペレドは〈他者〉をアクターとして組み込んだ分析枠組みを提示しようとする。すなわち「パイオニア（＝労働シオニスト）（‘Pioneers’）」、「正統派ユダヤ教徒（Orthodox Jews）」（以上2つのカテゴリーがアシュケナジー・エリートを構成）、「ミズラヒーム（Mizrahim）」、「イスラエル国籍をもつ二級市民としてのパレスチナ人（Second-Class-Citizen Palestinians）」、「非イスラエル国籍（＝イスラエル占領地）のパレスチナ人（Non-Citizen Palestinians）」というイスラエル市民社会の骨格を構成する5つのエスニック諸集団の相互のダイナミズムが、ベン・グリオンが追求したエタティズムを媒介としながら、植民地主義的なフロンティア主義に基づくユダヤ人入植の排外主義的理念と市民社会の民主主義的普遍主義的理念の相互矛盾によっていかに構築されていったかを、イスラエル現代社会を歴史的に再解釈する意図のもとに簡潔に展望するのである。

実はこのような諸アクターの設定の仕方自体は必ずしも斬新なものではない。すでにハイファ大学の社会学者サミー・スムーハが、一方でイスラエルの正統派社会学の機能主義への批判を意図して、他方でイスラエルの「一民族（ユダヤ民族）＝単一言語（ヘブライ語）＝単一文化（ユダヤ文化）」という「単一民族神話」の幻想に立脚するネーション・ステートのイデオロギー的源泉としてのシオニズムを相対化する意味を込めて、1970年代終わりから今日に至るまで一貫して多元主義の立場に立ったイスラエル社会論を展開してきたからである [SMOOHA 1978]。もちろんイスラエル占領地のパレスチナ人はアクターとしては明示的には設定されていないし1970年代という時代状況に制約されている側面は否定できない。しかしイスラエル社会分析における左右両翼のイデオロギーに基づくユートピア的理想を排除してイスラエル国内のパレスチナ人、つまりイスラエルのアラブ、を積極的に導入したという意味で彼は早い時期から本論でいうところのシオニストにとっての〈他者〉を分析枠組みに組み入れてきた例外的な研究者であった。その際やはり、社会学者スムーハ自身が内在的〈他者〉であったイラク系ユダヤ人の出自をもつことは強調されてしかるべきであろう（イスラエルでのイラク系ユダヤ人の従属的地位を規定したイスラエルへの移民の政治過程については [USUKI 1995a] を参照）。

ここではペレドとシャフィールの分析プロセスを詳細に述べる余裕はないが、その論点は次の一節に集約できよう。「イスラエル政体は（独立宣言に記された）2つの部分的に矛盾する至上命令のもとに機能した。つまり、入植および（ユダヤ民族的）国民形成

(nation-building) という排外主義的な至上命令、そして(非宗派的・民主的) 国家建設(state-building) という普遍主義的な至上命令とである。その結果、社会的に分裂したままでそこにヒエラルキーが貫く市民社会の構造が形成され、そのような構造を通してイスラエルの制御システムの範囲内に属すると認定された様々な諸集団が差別的にイスラエル社会に組み込まれていくことになった。このような市民社会の構造のおかげで、国家の動員能力が強力である限り、また最も底辺に帰属されるとされた集団つまり非イスラエル国籍の(占領地の)パレスチナ人からの抵抗が低い限りは、排外主義と普遍主義という両者の緊張を切り抜けることができたのである」(丸括弧は引用者による) [PELED & SHAFIR 1996: 409]。しかし最近ではイスラエル経済の民営化、自由化のために国家の動員能力が低下したうえ、占領地のパレスチナ人のナショナリズム昂揚によって、国家はパレスチナ・ナショナリズムへの敵対的姿勢を急速に穏健化せざるをえなくなって和平路線を追求し始めた。ところが1995年11月4日のラビン首相暗殺はそのような和平路線が必ずしも支持されていないことを明らかにしたと結論づける。<sup>\*6</sup> もちろんこの分析は1996年6月の首相公選におけるリクードのネタニヤフが勝利する前の時点のものである。

ヘブライ大学のエリック・コーヘンのような正統派に属する社会学者のなかにも、イスラエル政治文化のヘゲモニーを握るアシュケ

ナジームにとってユダヤ人の内在的〈他者〉であるミズラヒームの台頭やイスラエルのアラブを積極的にイスラエル社会の分析枠組みに取り込もうとする研究者も存在するが [COHEN 1989]、残念ながら占領地のパレスチナ人までも同時に組み入れることには必ずしも成功していないのである。実際、イスラエルにおける社会科学、具体的には政治学、人類学、あるいは社会学の研究動向を見渡しても数少ない例外を除いては全般として成功していない。

例えば、社会学の分野では「エスニック分業」論を提げて新従属理論の枠組みをイスラエル社会に援用することで1970年代終わりから80年代初頭にかけてミズラヒーム解放のための実践的研究の先駆的役割を担った「批判的社会学者」の一人であるシュロモー・スヴィルスキー元ハイファ大学教授 [SWIRSKI 1989] がいる。かれはS・N・アイゼンシュタットなどの近代化論者によるイスラエル正統学派に対して厳しい批判を展開しつつも一国的分析枠組み内に留まり、方法論的にはイスラエル内のパレスチナ人と占領地のパレスチナ人の存在を結果的に排除してしまったという意味では同じ陥穽に陥っている(このミズラヒームに関する研究動向に関しては [USUKI 1995b] [白杵 1996b] を参照されたい)。ただし、スヴィルスキーと同様にハイファ大学を拠点に活動するデボラ・ベルンシュタインのような例外もある。1970年代はじめに活動したミズラヒームのうちのモロッコ系ユダヤ人

\* 6 ラビン暗殺犯が敬虔なユダヤ教信仰をもつエメン系ユダヤ人であったという事実は、エスニック問題や聖俗問題からも、あるいは両者が交錯する観点からも、イスラエルという枠を越えたところで、これからのイスラエル政治社会論のあり方に相当深刻なインパクトを与えることになるだろうが、まだアカ

デミックなレベルでの議論は時期尚早であり、現れてはいない。しかし管見のかぎりでは、その副題にある宗教、ナショナリズム、暴力というキーワードに示される [Kaplouk 1996] のジャーナリスティックな濃密な記述が最も興味深い。また私自身の試論的なエッセイ [白杵 1996a] も参照されたい。

によるラディカルなプロテスト運動のブラック・パンサー運動に関する社会学的研究から彼女は研究者としてのキャリアを開始した。彼女は近年ではイスラエル社会の〈他者〉として、パレスチナ人のみならず、もう一つの見えざる〈他者〉である女性をも射程に入れた社会学的歴史研究を模索している [BERNSTEIN 1987] [BERNSTEIN 1995]。

ここで指摘しておかねばならないのは、研究アジェンダの転換という観点からみた場合、コーヘンと同様、出発点は主流派に属していた人類学者ワイングロッド（ベン・グリオン大学）のようなエスニック問題としてのミズラヒーム研究から民族問題としてパレスチナ人研究へと関心をずらしている事例も少なからず存在するという点である [ROMANN & WEINGROD 1991]。さらに政治社会学の分野でもパレスチナ人の存在を視野に入れ、イスラエルの社会科学の支配的ディスクールの排外主義的イデオロギー性を批判的に検討したバルーフ・キマリグ（ヘブライ大学）の先駆的な論文もあげておく必要がある。かれは「イスラエルの社会科学は国家建設過程と新社会形成における切り離せない部分だと認識されてきた。実際、社会学の制度化と国家の発展とは多くの点で軌を一にしてきた。この職業集団を形成した男女は社会のエリートの一部になった。かれらはシオニズムにイデオロギー的にコミットするか、あるいはシオニズムが新社会およびその権力構造に入り込むための唯一の道であったがゆえに、シオニズムの事業の発展に奉仕した」 [KIMMERLING 1992: 457] と指摘する。このようなエスタブリッシュメント内部からの批判的言及以上に重要な点は、〈他者〉とみなされたイスラエルのパレスチナ人の若い世代から研究

者が育ってきているという事実である。しかしこの点に関する議論は本論の射程を越えてしまうのでこれ以上触れない。

シオニズム・イデオロギーに内在化されている〈他者〉排除の論理は多かれ少なかれネーション・ステートには共通するものである。しかしそれが研究領域におけるドミナントな言説に濃い影を落として、結果的にはパレスチナ人やミズラヒームという外在的・内在的〈他者〉の存在を分析枠組みに組み入れたイスラエル社会分析の試みは意外に新しいイスラエルのアカデミズムでの現象であるとするならば、やはりわれわれはその事実で愕然とせざるをえない。実際、シャフィールと同様の危機意識に基づいてヒスタドルート（イスラエル労働総同盟）に関する研究書を著したシャラヴも、マルクス的な「政治経済学 (Political Economy)」の復権を提唱しつつ、イスラエル社会を研究対象とした社会科学的アプローチの「後進性」を率直に認めているのである。すなわち「本書はイスラエルの社会科学分野において現在進行している知的刷新への貢献とみなされる。われわれのアプローチの主要な路線——それを‘批判的政治経済学’と名づけることができよう——は、イスラエル以外の学界全体ではすでに確立されたものではあるが、イスラエルにおいてはつい最近出現したものにはすぎない」 [SHALEV 1992: 13]。「イスラエルによるレバノン侵略、長引く西岸・ガザ占領、そしてこれらの問題を取り巻く緊迫する政治状況の分極化が1980年代における批判的社会科学をさらに推進することになった。新たな問題関心の焦点が民族紛争と、その紛争がイスラエル社会の形成と発展に対して与えた多様な波及効果であったことは驚くには及ばない。伝

統的にはイスラエルの社会科学では『見えざる人間 (invisible men)』とみなされていたイスラエルおよび占領地におけるパレスチナ人の立場に対してユダヤ人研究者が関心を増大させ始めたことにも関連する動向として指摘できる」[SHALEV 1992: 14]。この引用からわれわれはパレスチナ／イスラエル地域研究的な方向性をもった政治経済学の始動を見て取ることができる。さらに付け加えれば、同様の立場からシャフィールのように20世紀初頭ではなく、現代イスラエルをも射程に入れたヒスタドルト研究の先鞭をつけたのが[GRINBERG 1991]であった。

人類学の分野でもアメリカでのジェームス・クリフォードやジョージ・マーカスによる実験的民族誌記述の提唱に影響を受けつつ、本論で指摘したネーション・ステートの境界を克服しようとするパレスチナ／イスラエル地域研究的アプローチ[ALCALAY 1993]で記述した新たな研究が現れている。イスラエル人ではないがユダヤ系アメリカ人文化人類学者ジョナサン・ボヤリンは、実験的民族誌記述に基づくフィールド日誌とそれに関連する3本のエッセイを交互に並置して構成される『パレスチナとユダヤ史——民族誌の境界での批判』[BOYARIN 1996]という書名をもつ「作品」[立本 1996: 7]を出版した。著者は〈他者〉の時間と空間をめぐる記憶のポリティックスを扱ったその書名の由来を、著者が「イスラエルとパレスチナ」に関して書くことから、パレスチナと“ユダヤ (Jewish)”史について記述することに(その民族誌的記述の戦略を)変えて……“ユダヤ人 (Jewish)”当事者=代理人(agent)に映ったパレスチナ人アイデンティティの維持と変遷の帰結を検証する」[BOYARIN 1996:

10]ことを意図しているためだと説明している。かれが“ユダヤ (Jewish)”をクォーターション・マークで括っているのはユダヤ人であれパレスチナ人であれ「所与のアイデンティティの修辭的反復を駆逐する」のが本書の目的そのものだからであるが、かれ自身は“ユダヤ人 (Jewish)”当事者=代理人(agent)としてPLOとの和平を求めてきたユダヤ人平和団体(International Jewish Peace Union)に積極的に関与しながらもユダヤ人側に否応なく立っていることも率直に認めている。本書の柱となるエッセイはエドワード・サイドとアントーン・シャマースなどのパレスチナ人とのダイアログや日常的接触を自省的に日誌という形式で記述することを通して「諸文化の“総体”を描こうとする未だに強力な衝動に抗して、民族誌的知見の部分的かつ試論的性格を伝えながら断片的であろうとする民族誌」[BOYARIN 1996: 25]を試みているのである。

さらに、イスラエル生まれの若い世代の人類学者も、新しい批判的研究動向を踏まえつつ、パレスチナ人のイスラエルへの従属性を自明の前提としてユダヤ人の新興都市である上ナザレ市に主体的に移住したパレスチナ人の民族誌的記述を展開している。「私はイスラエルのパレスチナ人の政治的・社会的・文化的・経済的従属性を悲惨なものとして、かつ自明の前提として議論する。この現実の理解こそが本書の出発点であって目的ではないのである。むしろ、私の理論的展望としては、イスラエルにおけるパレスチナ人の存在が日常生活の多くの諸側面でイスラエル人およびパレスチナ人による個人的および集団的な相互関係に重要な影響を及ぼしていることを示すことなのである」[RABINOWITZ 1997: 19]。



イスラエルとはまったく違ったコンテキストで中東地域研究が開始されたわが国における研究状況をイスラエルのそれとは単純には比較できないにしても、再三引用した大岩川が1960年代終わりから地域研究的な視点からパレスチナ／イスラエル研究を提唱していたことをここで改めて繰り返しておくことも無益ではなからう。「イーシューヴ形成史はシオニズム運動史の一環というだけではなく、何よりもパレスチナの現代史としてたちあらわれる。ただ、アラブ人とユダヤ人入植者の激しい闘争の過程を経てきたこの地域については、資料の欠如その他の技術的制約から見て、現代史を総合的に把握することはおそらく不可能に近いといつてよいであろう。けれども、少なくともこの視角の確認を経ない限りは、現代イスラエルに迫る方法は生み出せないのではないだろうか」[大岩川 1984: 4]。大岩川が提唱している方法と視角とはパレスチナ／イスラエル地域研究的アプローチを内包した1980年代以降の「新しい歴史家たち」、「批判的社會学者」あるいは「批判的政治經濟学者」、そして一部の人類学者の議論とは軌を一にしているという点を改めて強調しておきたい [白杵 1995a]。

むしろ本論の文脈で特筆すべき大岩川の指摘は「もともと世界のユダヤ人を民族共同体と規定したのは、イデオロギーとしてのシオニズムに他ならなかった。そして、現代イスラエルこそが、この民族共同体を代表するものであるとするところに、まさにナショナリズム一般とは異なったシオニズムの特徴が見られる」[大岩川 1984: 4] という点である。大岩川が「ユダヤ民族共同体」の幻想をイスラエルに同一視するような言説を批判的に検討していたことは、現在イスラエルでも進行

しつつある新しい研究の方向性を予言的に示唆したものであるといえる。先ほどあげた人類学者ボヤリンによる「ユダヤ民族誌的記述 (Jewish ethnography)」の提唱も、〈他者〉としてのパレスチナ人と自分自身の「帰属」している「ユダヤ人」という自他の境界を問題とすることで、ユダヤ民族史観を脱構築しようとする試みと位置づけることができる。歴史研究の分野でも例えば、ベネディクト・アンダーソン、アーネスト・ゲルナー、そしてエリック・ホブズボームなどによって展開されてきたナショナリズム論をも射程に入れながらダヴィッド・N・メイヤーズは「ユダヤ的過去の再発明——ヨーロッパ・ユダヤ人知識人とシオニストによる歴史への回帰」[MYERS 1995] において、大岩川の呼ぶところの「ユダヤ民族共同体」の幻想の形成過程を、創成期のエルサレム・ヘブライ大学におけるユダヤ研究の重鎮 (イツハク・フリッツ・バエル、ベン＝ツィヨン・ディナブルグ、ゲルション・ショーレムなど) によるナショナリスト的言説の形成のなかに探った。その際、シオニズムに奉仕したヘブライ大学のユダヤ人研究者たちの視角もやはり「民族集団のアイデンティティの境界を設定しようと意図している」ので、栄光ある過去の民族的過去への回帰というテーマに奉じることによって自分たちの主張を正当化してきたことがしばしばであった」[MYERS 1995: 3] ことを明らかにしているのである。

メイヤーズは、前述したイスラエルにおける「新しい歴史記述」論争についても射程に入れて次のように述べている。「イスラエルが「ポスト・シオニズム」期に入ったという想定をもとに議論を続けると、確かに最も興味深い研究動向の表明はシオニズムの基礎を

なす神話を検証しようとする新しい批判的歴史記述の登場であろう。この新しい歴史記述はパレスチナへのシオニストの第一波移民の重要性から新生イスラエル国家の対アラブ政策に至るまで論争を巻き起こす様々な諸問題を発掘してきた。……この歴史記述をめぐる論争はイスラエル国民意識とアイデンティティの重要な転換点になるに至った。長びいた危機の時代に続き、イスラエルはシオニズムの起源に関して、新鮮かつ批判的な検討を許すまでに物理的な安全を得、政治的な成熟を獲得するレベルにまで達した。新しい歴史記述のパーспекティヴは、確かにすべての人々から幅広く歓迎されているわけではないけれども、このような成熟の副産物なのである」[MYERS 1995: 12]。

メイヤーズの指摘するシオニズムの「神話」の起源を探る議論はもう後戻りできない段階にまで達している。私自身もイスラエルにおけるホロコースの神話の誕生の政治的契機に関して議論したことがあるが[白杵 1996b]、その際1980年代以降のイスラエルの政治文化に関する新しい知見を含んだ諸研究([LIEBMAN & DON-YEHIYA 1983], [ARONOFF 1989], [ZERUBAVEL 1991])を参照した。しかしながら現在ではそのような潮流はさらに大きな流れとなり、例えば労働シオニズムのシンボルになっている「マサダ砦」に関する神話的言説の形成過程を追求した社会学的研究も登場している[BEN-YEHUDA 1995]。さらには、イスラエルの研究者ではないが、シオニズムの神話が現在の自己イメージの原像として依拠する「古代イスラエル」像自体が実は19世紀のヨーロッパ国民国家のイメージを投影した、サイード的な意味でのオリエンタリスト的な捏

造であるとする、旧約聖書学の長い知的伝統に対して果敢に挑戦する挑発的な議論さえもが生まれている [WHITELAM 1996]。

ところで、これまで本論で行ってきたイスラエル社会分析における〈他者〉性の認識の欠如の議論に関しては、労働シオニズムの抱え込む「東方」性をめぐるディレンマをユダヤ人問題とパレスチナ問題に関連させて私は次のように指摘したことがある。

「……ポグロムの結果、難民として西欧・中欧への移民を余儀なくされた東方ユダヤ人(Ostjuden)自身が西欧で「東方的(=アジア)」な価値を表象する存在として蔑まれた被差別意識を、パレスチナという「東方」においては、もっと「東方」から来たユダヤ人「同胞」に対する差別意識に転化させてしまうという、「ユダヤ人」内部の差別の重層化とその拡散の問題である(もっと深刻な問題は、パレスチナに住んでいた「他者」としてのムスリムやキリスト教徒のアラブはそもそもかれらの視野にも入ってこなかった、つまり「存在」すらしなかったという認識であるが本論では論及できない)」[白杵 1994b: 89]。

引用文の最後で留保していた、シオニズムの言説における〈他者〉としてのパレスチナ人の排除、あるいは抑圧/周辺化の問題については、必ずしも十分であるとはいえないが、本論の前節で、社会科学的イスラエル研究の新しい研究動向を垣間見ることによって、その一端を指摘できたと思う。また、〈他者〉としてのミズラヒームについてはモロッコ系ユダヤ人を事例に、シオニズム・イデオロギーにおける「東洋」と「都市」をキーワードとしてイスラエル社会からの抑圧/周辺化のプロセスを私は別の論文で議論した[白杵 1997]。しかしながら残されている課題もむ

ろんある。すなわち、これまでのイスラエル社会分析の正統派研究者の言説において〈他者〉として位置づけられた、一方でイスラエル国籍をもつパレスチナ人あるいは占領地のパレスチナ人、他方でスファラディームおよびミズラヒームという、排除され抑圧／周辺化された諸集団の相互の関係はどのように考えるべきなのか、という点である。

残念ながら私はこの問題に正面から取り組んだ「作品」を未だに提示することはできていないが、しかし試論的なエッセイという形でこの問題を部分的には取り上げたことがある [白杵 1994c] [白杵 1995] [Usuki 1996]。ここでも問題の焦点は、イスラエルは閉じられた特殊な性格を帯びるユダヤ「民族」国家であるべきか、それとも、普遍的な性格を帯びた開かれた「民主」国家であるべきかという、ナショナリズムと民主主義の相互関係に関する設問によって導かれるマジョリティー・マイノリティ関係を軸とするアポリアをめぐるものであった。このような問題設定自体は本論において議論の出発点としてきた前提ではあったが、しかしながらこのような設問に立つ限り、われわれはトートロジー的な出口なしの状況にたち至ってしまうことになる。なぜなら、このような設問の仕方では同一の土地をめぐる紛争の解決のためには国家をもたない民族的なマイノリティ集団が既存の領域国家の一部に排他的な主権国家を実現するというネーション・ステートの前提がある以上、解決の行方は国家建設の次元の問題に解消されてしまうからである。

#### IV. 結語

本論で述べてきたイスラエルにおけるモリスなどの「新しい歴史記述」、シャフィール

などの「批判的社会学」あるいはシャレヴなどの「批判的政治経済学」の潮流は、イスラエル国家において〈他者〉を排除するメカニズムとは何かを究明しようとしている。とりわけ後二者はネオ・マルクス主義的な研究方法を駆使しつつ新たな分析枠組みをめざしている。その際、シャフィールはパイオニア的ユダヤ人入植をアメリカやオーストラリアのように先住民族を排除して成立した古典的な入植活動として捉え、社会経済的観点から「イシューヴ分離発展論」への批判を展開している。同時にイエメン系ユダヤ人の移民労働者のパレスチナへの移入問題の理論的解明への関心に集中的に現れているように、ミズラヒームをアフリカ系アメリカ人とのアナロジーとして捉えている側面があることも否定できない。だからこそ、1967年以後の民族エスニック紛争のプロトタイプとして、20世紀初頭のイエメン系ユダヤ人の労働移入問題とアラブ労働者排斥への問題関心が浮上し、現代イスラエル社会内のユダヤ人内の「人種問題」的性格をもつミズラヒームと、「先住民族問題」としての占領地パレスチナ人との激しい敵対関係を、パロキアルな「民族的憎悪」といった還元主義的な神話的言説で捉えるのではなく、イスラエル労働市場での競合関係として捉える視点が生まれてくるのである。ここには政治経済学あるいは社会学的歴史研究からのパレスチナ／イスラエル地域研究的アプローチの必要性がイスラエル労働市場という場を介して提起されているとも解釈が可能なのである [SHAFIR 1989: 91-122]。

ところが大岩川和正がかつて指摘したように、イシューヴの発展はパレスチナという「地域」の社会経済史の課題として捉えるべきだという見解は、現代アラブ研究としてパ

レスチナにアプローチする場合は社会経済学者の間ではむしろ共通の認識となっているといえる [白杵 1990: 80-95] [白杵 1991]。この認識を前提とすれば、「批判的政治経済学」も1967年以降のイスラエルにおける労働市場におけるパレスチナ人出稼ぎ労働者の存在に注目し、イスラエル国家の枠組みを越えたパレスチナ／イスラエルという地域そのものに遅ればせながら注目し始めたという点において、地域研究的視点の導入としてはやはり特筆に値するといえるのである。換言すれば、イスラエルにおけるこのような新しい研究動向の登場が時期的に遅れたという事実からは、むしろイスラエルのナショナリティ形成におけるシオニズムのイデオロギー的桎梏の凄まじさと、ポスト・シオニズムの模索の苦悩の裏返し表現であると捉えるべき問題であるともいえよう。

その意味では、かつてイスラエル内部から生まれた批判的イスラエル政治社会論のプロトタイプといってもいい、新左翼のマツペン系知識人たちによる当時としては「異端」的な反シオニズムへの批判的言説との類似性と歴史的連続性を想起することができるかもしれない。だからこそかれらのかつての議論が新たな状況で新たな意味をもち始めたがゆえに、新たな形で出版されるといった現象にも見て取ることのできるのである [Orr 1994] [Davis 1987]。しかし、かつてのイスラエル新左翼によるパレスチナ人との共存というユートピア的言説への「回帰」とも取れるような新しい研究動向は、決して古い袋に新しいワインを盛ったという皮相的なレベルの議論に収斂させるべきではないと、私は考えている。何度も繰り返してきたように、イスラエルを取り巻く時代状況のドラスティックな変

化はいうまでもないことであるが、むしろ重要なことはイスラエルのアカデミズムのエスタブリッシュメント内部に育った若い世代からこのような新しい芽が生まれつつあるということなのである。

ポスト冷戦期において「ネーション・ステート」としてのイスラエル国家形成とイスラエル人国民意識の形成を議論する際には、ユダヤ民族史観による説明はすでに破綻してしまったことを前提として、社会科学の課題としてイスラエル「国民」とユダヤ「民族」の相克を直視することは免れざるをえない [白杵 1996b]。同時に、このような形成過程にはパレスチナ人およびミズラヒームという〈他者〉の排除あるいは抑圧／周辺化のメカニズムが働いているという政治文化的視角のみならず、社会経済的な視点からの解明も同時に必要であることは本論を通して議論してきたことでもある。したがって、かつてのパルチザン的な階級闘争とそれに基づく民衆的民族間連帯の理想主義的な言説の内包とはかなりの重なりを見せているとはいいながら、最近の社会科学の手法を駆使した「作品」群は「インター・ナショナリズム」の理解において政治的マニフェストとしての性格を帯びていたかつての議論とはその差異を際立たせている。繰り返しになるが、若い世代の批判的研究者群はアカデミズムの内側からポストコロニアル的契機において〈他者〉を積極的に取り込んでおり、本論で議論してきた地域研究的認識と方法への関心を増大させているという意味において「パラダイムの転換」とも呼ぶことができるのである。

翻って明治以降の「日本人」の意識形成に関するわが国の「大日本帝国」研究の現状を管見の限りで一瞥すると、台湾、朝鮮半島、

旧「満洲」、あるいは南洋諸島などの旧植民地をも分析射程に入れた斬新な実証研究が1960年以降に生まれた若い世代の研究者によって産み出されつつある〔小熊 1995〕〔駒込 1996〕。もちろん一国的枠組みに安住する「日本史イデオロギー」への無自覚さに基づく研究者の安易な姿勢への強烈な批判は板垣雄三によってすでに1960年代初頭にはすでに展開されていた〔板垣 1961〕。しかしながら新しい視角をもつ最近の研究は冒頭にも述べたオリエンタリズム批判、ポストコロニアルな契機をもって、あるいはカルチュラル・スタディーズといった最近の潮流の一部として新たな形で再生し始めた〔酒井 1996〕〔酒井他共編 1996〕。その意味ではその批判的スタンスは「日本民族イデオロギー」批判とユダヤ民族史観への批判とに共通する知的な潮流として見ることもあながち的外れではないのである。

というのも、イスラエル建国前はもちろんであるが、1967年以降のイスラエルの「植民地政策学」としての占領地政策を含めた知の系譜を考えると、そこには制度としてのオリエンタリズムを体現したイスラエル人アラビストの巨大な群像がそびえたっているからである。本論の冒頭で述べたようにかれらはイ

スラーム研究あるいはアラブ研究において膨大な研究蓄積を残してきた（その一端は〔白杵 1995a〕を参照されたい）。姜尚中がその著書で福田徳三、新渡戸稲造、矢内原忠雄、そして白鳥庫吉らの「日本」のオリエンタリズムの系譜と「大日本帝国」の植民地政策の共犯関係について鋭く指摘しているが〔姜 1996: 82-146〕、同じような分析視角で地域研究者たるイスラエル人アラビストもやはり批判的に検討されなければならない。われわれもかつての地域研究とコロニアリズムとの「共犯関係」を直視しつつ、本論で議論したイスラエルの社会科学アカデミズムにおける現代イスラエル政治社会研究が被ってきた制度的な被制約性を克服したところに地域研究の新たな可能性を見出せるのであろう。しかしわれわれはそのようなオリエンタリズム批判あるいはポストコロニアルな契機も取り込みつつカルチュラル・スタディーズなどの新しい潮流との関係をどのように作りあげて、新しい認識と方法の「地域研究」を提唱できるのであろうか。それが「地域研究」者として「中東」と「日本」の間の絶え間ない往復運動のなかに生きる私の目下の課題であると痛感しているところである。

#### 参考文献

板垣雄三

1961 「〈近代日本をどうみるか〉・近代史の方法へのプロローグ」『歴史学研究』250: 25-29

1992a 『石の叫びに耳を澄ます——中東和平の探索——』, 平凡社

1992b 『歴史の現在と地域学——現代中東への視角——』, 岩波書店

小熊英二

1995 『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜——』, 新曜社

酒井直樹

1996 『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史—地政的配置——』, 新曜社

酒井直樹, ブレッド・バリー, 伊豫谷登土翁共編

1996 『ナショナリティの脱構築』(バルマケイア叢書5), 柏書房

立本成文

- 1996 『地域研究の問題と方法——社会文化生態力学の試み——』, 京都大学学術出版会
- 白杵 陽
- 1990 「委任統治期パレスチナにおける民族問題の展開——パレスチナ共産党にみる「民族」の位相——」長沢栄治編『東アラブ社会変容の構図』研究双書 392, アジア経済研究所, 4-100
- 1991 「イスラエル占領地の社会経済構造——ヨルダン川西岸の従属化を事例として——」清水学編『現代中東の構造変動』研究双書411, アジア経済研究所, 3-55
- 1993a 「第1次世界大戦前のエルサレムにおけるイエメン系ユダヤ教徒コミュニティ——アリヤー, 入植, およびセファラディームとの関係を中心に」『オリエント』36(2): 67-82
- 1993b 「アラブ・イスラエル紛争」森利一編『現代アジアの戦争——その原因と特質』, 啓文社, 317-369
- 1993c 「セファラディームおよびミズラヒームに関する研究動向——ヘブライ語誌『ペアミーム』を手がかりにして——」『佐賀大学教養部研究紀要』25: 129-153
- 1994a 「イスラエル建国, パレスチナ難民問題, およびアブドゥッラー国王——1948年戦争をめぐる「修正主義」学派の議論を中心として——」『大阪外国語大学アジア学論叢』4: 183-216
- 1994b 「イスラームとヨーロッパのはざま——ミズラヒーム(東洋系ユダヤ人)論序説——」『現代思想 特集 ユダヤ人』22(8): 84-101
- 1994c 「マイノリティからの眼差し——イスラエル/パレスチナの「国家」像をめぐる論争——」『グリオ』7: 170-176
- 1995a 「現代パレスチナ・イスラエル研究へのプロローグ——故大岩川和正氏の業績をめぐる——」長沢栄治編『現代中東の民族と民族主義——資料と分析視角——』, アジア経済研究所, 11-40
- 1995b 「方法としての〈パレスチナ〉——エドワード・サイードにととのエルサレム・カイロ——」『現代思想 特集 サイード以降』23(3): 145-158
- 1995c 「〈地中海〉の記憶と蘇生——〈レヴァント〉のユダヤ人——」『現代思想 特集 回帰する地中海』23(6): 158-169
- 1995d 「バイリンガル・ハイファ?——ヘブライ語 and/or アラビア語都市——」『みすず』37(1): 11-21
- 1995e 「パレスチナ問題」板垣雄三監修『イスラーム研究ハンドブック』(講座イスラーム世界 別巻), 栄光研究所, 210-217
- 1996a 「「歴史」としてのラビン暗殺」『現代思想 小特集 ラビン暗殺の衝撃』24(1): 14-23
- 1996b 「イスラエルとホロコーストの記憶——「国民」と「民族」の相克——」『現代思想 特集 想像の共同体』24(9): 213-223
- 1996c 「ユダヤ人/教徒の言説としての地中海」『一橋論叢 特集 地中海における少数集団』116(4): 152-165
- 1997 「差別からのドロップ・イン——モロッコ系ユダヤ人」栗原彬編『現代世界の差別構造』(講座差別の社会学) 3: 109-122

大岩川和正

1993 『現代イスラエルの社会経済構造——パレスチナにおけるユダヤ人入植村の研究——』, 東京大学出版会

太田好信

- 1993 「オリエンタリズム批判と人類学」『国立民族学博物館研究報告』18(3): 453-494
- 1996a 「人類学/カルチュラルスタディーズ/ポストコロニアルモメント, あるいは新たな節合の可能性」『現代思想』24(3): 124-137
- 1996b 「ポストコロニアル批判を越えるために——翻訳・ポジッション・民族誌的知識」, 清水昭俊編『思想化される周辺世界』(岩波講座文化人類学12) 283-307

姜 尚中

1996 『オリエンタリズムの彼方に——近代文化批判——』, 岩波書店

駒込 武

1996 『植民地帝国日本の文化統合』, 岩波書店

ALCALAY, Ammiel

1993 *After Jews and Arabs: Remaking Levantine Culture*, Minneapolis: University of Minnesota Press.

- ALMOG, Shmuel  
1983 *Zionism and the Arabs : Essays*, Jerusalem : The Historical Society of Israel and Zalman Shazar Center.
- ARONOFF, Myron J.  
1989 *Israeli Visions and Divisions : Cultural Change and Political Conflict*, New Brunswick : Transaction.  
1991 "Myths, Symbols, and Rituals of the Emerging State", in [Silberstein 1991], pp. 175-192.
- BEN-YEHUDA, Nachman  
1995 *The Masada Myth : Collective Memory and Mythmaking in Israel*, Madison : The University of Wisconsin Press.
- BERNSTEIN, Deborah S.  
1987 *The Struggle for Equality : Urban Women Workers in Prestate Israeli Society*, New York : Praeger.  
1995 "From Split Labour Market Strategy to Political Co-optation: The Palestine Labour League", *Middle Eastern Studies*, 31(4): 755-771.
- BOYARIN, Jonathan  
1996 *Palestine and Jewish History : Criticism at the Borders of Ethnography*, Minneapolis and London : University of Minnesota Press.
- CAPLAN, Neil  
1995, "Israeli Historiography : Beyond the 'New Historians'", *Israel Affairs*, 2(2): 156-172.
- COHEN, Erik  
1989 "The Changing legitimations of the State of Israel", *Studies in Contemporary Jewry*, 5 : 148-165.  
1995 "Israel as a Post-Zionism Society" in [WISTRICH & OHANA 1995], pp. 203-214.
- DAVIS, Uri  
1987 *Israel : An Apartheid State*, London : Zed Press.
- FLAPAN, Simha  
1987 *The Birth of Israel : Myth and Reality*, New York : Pantheon Books.
- GORNY, Yosef  
1987 *Zionism and the Arabs 1882-1948 : A Study of Ideology*, Oxford : Clarendon Press.
- GRINBERG, Lev Luis  
1991 *Split Corporatism in Israel*, New York : New York University Press.
- HISTORY AND MEMORY  
1995 "Special Issue: Israeli Historiography Revised", *History and Memory*, Vol. 7, No. 1.
- HOROWITZ, Dan and LISSAK Moshe  
1978 *Origins of the Israeli Polity : Palestine under the Mandate*, Chicago and London : University of Chicago Press.  
1989 *Trouble in Utopia : The Overburdened Polity of Israel*, Albanay : State University of New York.
- KAPELIOUK, Amnon  
1996 *Rabin, un assassinat politique : Religion, nationalisme, violence en Israël*, Paris : Le Monde Editions.
- KARSH, Efraim  
1997 *Fabricating Israeli History : The 'New Historians'*, London : Frank Cass.
- KIMMERLING, Baruch  
1992 "Sociology, Ideology, and Nation-Building : The Palestinians and their Meaning in Israeli Sociology", *American Sociological Review*, 57 : pp. 446-460.
- LIEBMAN, Charles S. and DON-YEHIYA Eliezer  
1983 *Civil Religion in Israel : Traditional Judaism and Political Culture in the Jewish State*, Berkeley, Los Angeles and London : University of California Press.
- LISSAK, Moshe  
1996 "'Critical Sociology' and 'Establishment' Sociology in the Israeli Academic Community : Ideological Struggles or Academic Discourse?", *Israel Studies*, 1(1): pp. 247-294

- MYERS, David N.  
1995 *Re-Inventing the Jewish Past : European Intellectuals and Zionist Return to History*, New York and Oxford : Oxford University Press.
- ORR, Akiva  
1994 *Israel : Politics, Myths and Identity Crisis*, London : Pluto.
- PELED, Yoav and SHAFIR, Gershon  
1996, "The Root of Peacemaking : The Dynamics of Citizenship on Israel, 1948-93", *International Journal of Middle Eastern Study*, 28 : 391-413.
- RABINOWITZ, Dan  
1997 *Overlooking Nazareth : The Ethnography of Exclusion in Galilee*, Cambridge : Cambridge University Press.
- RAM, Uri  
1995 *The Changing Agenda of Israeli Sociology : Theory, Ideology and Identity*, New York : State University of New York Press.
- ROMANN, Michael and WEINGROD, Alex  
1991 *Living Together Separately : Arab-Jewish Relations in Contemporary Jerusalem*, Princeton : Princeton University Press.
- SACHAR, Howard Morley  
1979 *A History of Israel : From the Rise of Zionism to Our Time*, New York : Knopf.
- SAID, Edward W. ed.  
1988 *Blaming the Victims : Spurious Scholarship and the Palestinian Question*, London : Verso.  
1993 *Culture and Imperialism*, New York : Alfred A.Knopf.
- SHAFIR, Gershon  
1984 "Changing Nationalism and Israel's 'Open Frontier' on the West Bank", *Theory and Society*, 13 : 803-827.  
1989 *Land, Labor and the Origins of the Israeli-Palestinian Conflict, 1882-1914*, Cambridge : Cambridge University Press.  
1996 "Preface to the Paperback Edition" in *Land, Labor and the Origins of the Israeli-Palestinian Conflict, 1882-1914*, Berkeley, Los Angeles and London : University California Press, pp. ix - xix .
- SHALEV, Michael  
1992 *Labour and the Political Economy in Israel*, New York : Oxford University Press.
- SHOHAT, Ella  
1989 *Israeli Cinema : East/West and the Politics of Representation*, Austin: University of Texas Press.
- SILBERSTEIN, Laurence J.  
1991 *New Perspectives on Israeli History : The Early Years of the State*, New York, New York University Press.
- SMOOHA, Sammy  
1978 *Israel : Pluralism and Conflict*, London : Routedledge and Kegan Paul.
- SWIRSKI, Shlomo  
1989 *Israel : The Oriental Majority*, London : Zed Press.
- TEORIA U-VIQORET  
1996 "ha-Historionim he-Hadashim (The New Historians), *Teoriau-Viqoret (Theory and Critics)*, No. 8, Summer (in Hebrew).
- USUKI, Akira  
1995a, "Zionism, Communism and Emigration of the Iraqi Jews : An Ancient Community in Crisis, 1941-1951", Truman Reprint, The Hebrew University of Jerusalem.  
1995b, "The Jews of Morroco and Israel : A Preliminary Note on Recent Trend of Study", *The Mediterranean World*, Vol. XIV, Mediterranean Research Group, Hitotsubashi University, pp. 47-58.  
1996 "Ecrivains bilingues (arabe-hebreu)", traduit par S. Inaga, *Dadéle*, 3 & 4 : 513-523.
- WHITELAM, Keith W.



1996 *The Invention of Ancient Israel : the Silencing of Palestinian History*, London and New York : Routledge.

WISTRICH, Robert and OHANA David

1995 *The Shaping of Israeli Identity : Myth, Memory and Trauma*, London : Frank Cass.

ZERUBAVEL, Yael

1991 “ New Beginning, Old Past : The Collective Memory of Pioneering in Israeli Culture ”, in SILBERSTEIN, pp. 193-215.